審査員賞
大塩陽菜「サリーの寄り道」

サリーの寄り道

桐蔭学園小学校　四年　大塩（おおしお）　陽菜（ひな）

家の近くに新しいレストランができた。名前は「サリーの寄り道」。今日のランチはサリーへ行こう。私はお気に入りの大きなリボンがついたコートを羽織り、家を出た。

茶色い大きなドア。その前に小さな看板があった。メニューと書いてあったその看板には「プロヴァンスの春」とだけ書かれていた。プロヴァンスの春とは一体どんな料理なのだろう。私は興味津々で目の前の大きなドアをそっと開けた。

いらっしゃいませと言う声は聞こえてこなかった。誰もいない。店内は薄暗く、寂しい感じだった。小さなテーブルと椅子がいくつかある。私は、入口から一番近い席に座った。

座った後、私はすぐに後悔した。薄暗い店内に一人。やっぱり帰ろうか、今ならそっと出ていけば大丈夫。私は、できるだけ自然に後ろを振り返った。その時、

「いらっしゃいませ。」低い声だった。男の人かな。前を向くとおじさんが立っていた。

「お食事の準備をしてもよろしいですか。」

丁寧な口調だった。良かったぁ。私は少しほっとして、「はい、お願いします。」と答えた。そういえば、メニューにあったプロヴァンスの春とはどんな料理だろう。私は忘れていたメニューのことを思い出した。好き嫌いは特にない。だから、どんな料理でも美味しく食べれる。私は食べることが大好きだ。

運ばれてきたのは大きな鍋が一つ。スープかな。雪が降りそうなぐらい寒い日だった。店の人が、「この紙に食べたいものを書いて鍋の中に入れてください。」と言い、紙とペンをテーブルの上に置いた。私は一瞬、何のことかわからず店の人、おじさんの顔をじっと見た。おじさんは、「どうぞご自由に」と言い、私が紙に書くまで待っていた。食べたいものと言われても今食べたいものはプロヴァンスの春、これしか思いつかない。

私は、鍋の中に紙を入れた。それを確認したおじさんが、「よろしいですか。では始めますよ。」と言い、鍋を持ち上げ指の上でくるくると回し始めた。私は、何が始まったかよくわからないままおじさんの指と鍋を見ていた。鍋は勢いよく回り、何回転もして止まった。そしてその鍋は、そっとテーブルの上に置かれた。「少し、テーブルから離れてもらえますか。」おじさんが言った。そして今度は両手をあげ「いきますよ！」と言った。何かが起こる、そう思った私はおじさんの手から目が離せなかった。「さぁ、いきますよ！」と言った二度目、おじさんが鍋の蓋をあけると、ぼわっと大きな火が鍋から飛び出てきた。　うわ

審査員賞
大塩陽菜「サリーの寄り道」

っ、と思った瞬間、
「お待たせしましたぁ。」明るく元気な声がした。振り向くと、オリーブ色のエプロンをした女の人が料理をもって立っていた。
おじさんはもういなかった。
「プロヴァンスの春です。熱いので気をつけてくださいね。」女の人が笑顔で言った。私は、「ありがとうございます」と言い、一緒に出されたおしぼりで手を拭いた。久しぶりにとてもドキドキした。
料理から爽やかないい香りがした。ハーブかな。白いボウルの中には色とりどりの野菜とチキンが入っていた。もう少し冷めるまで待とうかな。店内は変わらず薄暗かった。よく見ると、テーブルも椅子もアンティークでお洒落だ。壁の柄はよく見えないけれど、ところどころレンガ風になっていた。そのレンガ風の壁のあたりから、小さな光が少しずつ私に近づいてきた。光は、ひとつ、ふたつ、みっつ、いくつもあった。何だろう、そう思った時、
「こんにちは。」優しい声だった。いつの間にか私はその小さな光に囲まれていた。
「きれいでしょ。」そう言ったのはおばあさん。小さな光の正体はキャンドルだった。
「大変お待たせいたしました」と言ってまた女の人がやってきた。隣には、おじさんもいた。明るくなった店の中に、キャンドルを持ったおばあさんと、女の人とおじさんがにこにこしながら立っている。
戸惑う私に女の人が言った。
「地元でレストランを開くのが夢だったの。でもね、このおじさんが子供の頃から憧れていたマジシャンになりたいって、さらにおばあさんが最近キャンドルアーティストになりたいって言うの。面白いでしょ。私がレストランをやるって言っているのに。もう、みんなのやりたいを一つにしたらこんなお店になっちゃった。」
女の人の胸にはサリーと書いたバッジがついていた。楽しそうな人たち。とても温かかった。春だ。そうだ、私もこれからもっと寄り道しよう。その前に
「プロヴァンスの春、いただきます。」

審査員賞
大塩陽菜「サリーの寄り道」

審査員講評＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「プロヴァンスの春」という料理名と、あやしげなお店の雰囲気に惹かれ、どんどん読み進めていきました。手品やキャンドルに主人公と同じように翻弄されつつ、明かされた事実に胸がじんわり温まります。お店を開くにあたってのサリーさんの寄り道と、料理を食べるまでの主人公の寄り道を通して、寄り道というものの持つ豊かさを感じさせてもらいました。

―― 田丸　雅智